

現地フォーラム「BSEに負けないぞ！第1弾－放牧で牛乳を－放牧成功の必要条件－」

4. 放牧で成功した事例

－なぜ成功したのか、その経営的側面－

(社)北海道酪農畜産協会・須藤純一

1. 放牧を導入した目的とその背景

放牧導入経営で成功した経営では、経営改善に向けたしっかりとした目的意識があり動機がある程度鮮明である。その要因の一つは生産システムとしての生産技術的な側面が上げられる。①は生産量の確保に向けた高泌乳指向がもたらした過度な穀物飼料依存への反省、②はそのような生産量にシフトした飼養に伴う家族労働の強化、③には乳牛疾病の多発化、④には飼養規模拡大と外部飼料依存がもたらす乳牛ふん尿の処理と利用の問題等である。要因の第二点目としては、経営経済的な側面が上げられる。ここには生産技術が大

きく反映されるものだが、①には生産量の拡大が必ずしも収益性の改善や向上に連動していないこと、②にはその原因として生産費用の増大と生産コストの上昇、③にはこのような収益面における停滞がもたらす投資効果の減退つまり負債償還の行き詰まりを招来する。こういった現状酪農経営に内在する種々の問題が近年大きく顕在化してきている。経営によってその現れかたやその程度が異なるが、このような課題から生産方式に疑問を感じその変更を強く意識していることが多くの放牧導入農家に共通している。

2. 放牧導入の必要条件と確立過程

最近年において一つのブームになっている放牧だが、その導入にはいくつかの条件や整備が伴う。その第一は施設周辺に一定の牧草地が集積していることである。第二には放牧利用に向けた環境整備が不可欠であり、牧柵や牛道および給水施設の整備への投資、さらにはその地域条件に合う放牧用草種の導入なども必要である。そして第三にはそれらのハードを十分に生かした放牧利用に向けたソフト面の研修・研鑽が重要になる。この場合

従来の採草利用とは異なった肥培管理の習得や栽培上の観察力なども重要な要件になる。いくつかの条件整備が不可欠だが、それがすべて整わなければ放牧導入ができないということではなく、実践しながら経営条件にマッチする方法に向けて逐次整備していくという段階的な導入方法が実際的でもある。乳牛を放牧に馴致していくという観点からも放牧方式の確立には少なくとも3年間程度の期間が必要と考えられる。

3. 放牧成功事例の取り組みとその成果(成功のための条件)

1) 放牧技術の習得に向けた情報収集とその活用

最近年における放牧成功経営には、その導入過程で一つの共通した取り組みが上げられる。その第一は単独ではなくグループ化による組織的取り組みであり、放牧利用についての技術交換・経験交流を行いながら進めていることである。各種の勉強会への積極的な参加やその定期的開催、放牧先進経営の視察や経営者を招いての実践的な研修などである。第二には近年では放牧利用についての各種の試験成績やそれに基づくマニュアルが整備されていることも放牧利用を成功に導く一つの条件づくりになっている。第三としては、放牧技術やその有効性等がインターネットなどをおし

て情報として広く入手でき交流できるような社会環境になっていることである。このような多様な技術習得への機会とその参加が多くの経験的知識として蓄積され放牧活用の効果を早めかつ大きくしているともいえる。

2) 放牧の導入は一つの生産技術ではなく生産システムの転換である

放牧活用効果をより大きくするためには、それを単なる生産技術として導入するのではなく経営のトータルな技術改善として位置付けることである。つまり、各経営の条件の範囲において生産システムの転換として飼養管理全体を見直す契機として捉えていることで

ある。この場合は特に飼養頭数と飼料栽培面積のバランスが重要になり、両者の適正化が重要視される。放牧導入が契機になって自給飼料生産とその利用内容が見直され、自給率を高める方向に再編強化されることが多くの事例で確認される。なお、この場合利用可能な飼料栽培面積から経営の各種条件に合う放牧方式について十分考慮し、現状経営の実態や導入目的から無理のない方法を選択することも重要視される。

3) 放牧導入による生産システムと生産費用構造の改善と向上

放牧導入あるいはその充実によって飼料給与構造の変化が明らかに認められる。自給飼料給与量の増大は自給率が向上して濃厚飼料の利用効率の上昇をもたらされる場合が多い。このため乳牛の健康回復による供用年数の延長がもたらされる。これらの結果は、購入飼料費の節減など投入生産費用に波及され、収益構造の変化をもたらしている。乳代収入に加え個体販売収入の増加が見込まれ、収入と投入費用のバランスが改善され所得の拡大に大きく貢献する。